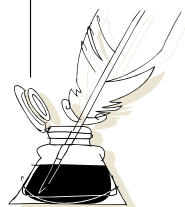


人生讃歌

小橋 博

散歩



二十歳から三十歳ころは、生きるには精神力が重要だと考えていたところがある。体力があつたから身体健康が大事だという意識に欠け、氣力が強ければ何とかなると考えていた氣がある。精神が体の中で作られるということに考えが及ばなかつた浅はかさである。七十五歳を過ぎて体力が急落してから、自分の見損ないが鮮明になり、筋肉が重要だと氣ついた。ま、若いころのぼくは、体を動かすのは骨だと思っていた氣配がある。

年とつてこんな幼稚なことを考えるのは、なんとか元氣のまま我が人生をおさらばしたいからである。昼間、健康な体で書いたり読んだりし、夜は酒をおいしく飲んで無駄口をたたき、鼻歌をうたつて寝て朝起きたら息をすてなかつた、というかたちを熱望しているからである。いまさら虫のいい話だが本音である。

それではじめてのが体操やスクワットや散歩である。とにかく歩け、と何にでも書いてある。なるべく楽しくやりたいのだが体操も歩きも楽しくない。そのうえ根が怠け者だからさぐ歩くに飽き、怠惰防止に万歩計を買つた。歩きたくない日、一歩で一秒長生きだぞ、歩くほど元氣に絶命できるぞ、と自分を喚け、妻をさそつて出発、五千歩を目標に歩く。家へ帰つ

て万歩計の数字を見るのを楽しみにして歩くなど子供っぽすぎるが、やるしかない。



しかし春の散歩は楽しい。陽の光が金色になり、山や畑の雪が溶けて黒土が見えだす。川面の氷が消えて流れの音が立ちのぼり、川岸の土手に露の臺が出て猫柳が芽ぶきだす。川べりを通つて山裾を回る道を行く足が、とても軽い。ぼくの年齢になると未来というものはないが、春がくると希望みtainなものを感じて氣持ちが浮き立つのである。



夏である。五天山の麓にある我が家を出、正面に立つ緑で丸く太つた手稲山へ向かつて歩く。散歩はいつも妻がいつしよである。自分一人だと続かないことがわかつている。十分ほど歩くと山ぎわを流れる琴似発寒川べりに着く。流れに沿つて岸の林の道を上流へ向かう。森で四十雀がツツピー、ツツピーと鳴く。百舌鳥や鶯の声もする。間もなく道ばたの桑の木に着き、黒く熟した実をとつて食べる。川をはなれて左手の丘へ登り、公園を通つて平和の滝へ通ずるバス通りへ出た。道路わきに「罷出沒場所注意」の標識が立つている。自然豊かな場所の証である。手稲山を背にして反対側の山へ向かつて歩き、途中の公園で「服、持参の茶を飲む。そばの草むらを狐が歩いている。よく見ることだ。森で山鳩の声が響く。あとは自宅までまっすぐ歩き、出掛けてから二時間、万歩計は五千歩。



散歩の道筋は五種類あり、秋はためらうことなく紅葉がきれいなところと木の実がとれる場所を選ぶ。この時季、琴似発寒川では海からのぼつてきた鮭を見ることがあるし、川岸の菓子胡桃と銀杏は毎年とつて冬に食べる。

★

年とつて体のあらゆる機能ががた減りしているのを感じるから、これ以上悪くなりたくなくて歩いてもいる。しかし歩きたくない。四十五歳のときビールの飲み過ぎで尿酸が増えて足の親指に激痛が起こり、それ以来四十年間、尿酸値を下げる薬を飲んでる。十年前、脾臓に水たまりがあると言われ、これはガンになる確率が高いからと十年間、検査をしているが水たまりはそのまま、いまのところ何でもないらしい。しょうちゅう胃が重いのは長いことの暴飲暴食のせいだろうが、胃カメラではポリープがあるが、これはどうってことないと言われて



挿絵/中江潤一

一応安心している。

二年ほど前、三十九度三分の熱が出た。病院で前立腺の検査をされ、がんの指標となるPSAだかの数値が、正常値四のところは七以上あると言われて震え上がった。薬を飲んで経過を見ると言われ、すぐ書店で家庭医学書を立ち読みし、九・九までが前立腺肥大症、十以上はがんの疑いを書いてあった。ぼくはすっかり怯え、飲酒を中止した。一カ月後、再検査すると数値の七が以下に下がってほっとした。ぼくは感情をすぐ態度にあらわす性格なので、その日から飲酒を再開したことは言うまでもない。それにしても前立腺が変だと言われると、すぐ酒をやめてみるあたり、ぼくの決断力もなかなかのものだ。

ともあれぼくはそのうえ異常なほどの肩凝りだが歯は自分のが二十九本あるし、老眼でも近眼でも遠視でもないから眼鏡がいらず、眼鏡代を酒に回せて助かる。車の運転も楽しいから毎日二時間ほど運転する。しかしまずは歩くことと本を読むことと、万年筆で字を書くことと飲酒に全力を集中している。

★

冬は山も川も白色だが、白は色の中で一番美しいと思うから、雪道が億劫でも出かける。家の近くの二軒の家に柿の木があり、葉の落ちた枝に鈴なりの実がなっているのを見るのが楽しみで通る。雪の白を背景にした実の赤茶色が燃え立つように美しい。山裾の小道へ出ると雪原に狐と山兔の足跡が続いている。跳び幅が大きく、元氣そうだ。

雪解け近い三月、残り少ない雪原に枯れた芒が二本、立っている。細いのに、吹雪き続けたこの冬、よく倒れなかったものだ。南へ傾いていて、春を招いているみたいだ。

①